

なくそう貧困。命の水を！

# アジアネット

JAFS

NEWS & REPORTS 2020年春

141



特集

ネパールへのかけ橋つとめ20年





since 1979

公益社団法人アジア協会アジア友の会  
Japan Asian Association & Asian Friendship Society



## ● 主な目次 ●

「巻頭言」アジア人同士の交流・刺激・協働 02

特集＝ネパールへのかけ橋つとめ20年

支援グループが現地への旅 04～07

ネパールの森づくりも20年 08

「土水」の輪、海外に広がる 09

インドネシアで植林と環境教育 10・11

近大生がカンボジアの子の夢を応援 12・13

アジア・フレンドシップ財団発足へ 13

英和対訳「海外からの報告」インド 14～17

「井戸ができた村」 18～21

AYS 参加の高校生たち着々と実行 22～24

「JAFS プラザ」＝国内の活動 25

アジアン・チャリティフェスティバルに 8

カ国から400人／私が育った光輝く国／鍋

とかくし芸で新年会

「われら JAFS の仲間たち」③ 26・27

新入会員紹介・領収報告 28・29

「里子の笑顔」「アジアの友から」 30

「環境コラム」 31

## アジア協会アジア友の会とは

アジア18カ国に井戸を贈る国際協力団体（NGO）です。1979年に大阪で設立。誰もが生まれてきて良かったと思える社会を目指し、2019年3月現在、井戸建設（累計2033基）や植林（累計255万本）、子ども教育支援を中心に活動しています。全国都道府県認可の社団法人取得第1号団体です。2012年4月1日からは、内閣総理大臣の認定を受け、公益社団法人になりました。

海外との交流・協力活動は、インド、インドネシア、バングラデシュ、タイ、マレーシア、フィリピン、スリランカ、ネパール、韓国、カンボジア、シンガポール、ミャンマー、ラオス、中国、ベトナム、モンゴル、パキスタン、アフガニスタン、さらに西アフリカのブルキナファソにも広がり、友情のネットワークが形成されています。

日本国内でも、各地でチャリティープログラム、自然環境プログラムなどを行っています。

※ホームページ <https://jafs.or.jp>

## 本会への寄付は、寄付金控除の対象です

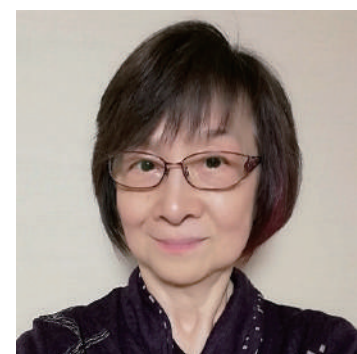
JAFSは内閣府より公益社団法人としての認定を受けています。JAFSへの寄付金や会費（社員会費は除く）は、申告によって、所得税、法人税、相続税について税制上の優遇措置（寄付金控除）を受けることができます。

確定申告の際、税額控除、所得控除のいずれか有利な方を選択できます。本会発行の領収書を添付して申告してください。法人税は損金の額に算入することができます。相続税は最寄りの税務署などにお問い合わせください。

## 巻頭言

数年前、大学1年生対象の基礎ゼミの授業で、ある女学生が慨然とした表情でプレゼンテーションを行った。「過去20年間、給料がほとんど上がっていないのはアジアの中で日本だけです」（もちろん、彼女が調べた範囲内のことではあるが）。大学1年生といえど18、19歳。つまり生まれてからずっと不況の中で育ち、エネルギーを日本を知らない若者たちである。残念ながら過去20年間ほとんど上がっていないのは、経済力だけではなく、英語力もほぼ横ばいだ。

## アジア人同士の交流・刺激・協働



新田 香織

JAFS 常任理事  
近畿大学非常勤講師

しまっている。それはTOEFL®という試験の平均点にも如実に表れている。ベトナム人の平均点がぐんぐんと伸びているのに対し、日本人の平均点はかすかにアップしている程度である。2010年頃は平均点は同程度、発表能力は日本人がやや勝るという印象であったのが、現在は英語力のみならず、好奇心や貪欲さ、情報収集や分析・発表能力などほぼすべてにわたって、その差がどんどん広がりに広がっている。

ばる若者がたくさんいます。それを誇りに思います」。英語力向上は英語教育の成果ではなかった。国の発展や人の幸せを思う気持ちの強さ、使命感が「学ぶエネルギーの源」だった。

英語教師としての三十数年、このような内なるモチベーションをもつ学生を何人育てることができたのだろうか。アジアの学生たちと交流する機会をもった日本人学生たちは確かに変化を示した。しかしその機会をもたない学生の方が圧倒的に多い。新型コロナウイルスに対してもアジア全体で、また世界全体で協力して早急に取り組まなくてはならない。グローバル化は止まらない。特に「同じアジア人」と世界からみなされるアジアの人々との交流の機会を少しでも多く提供し、早急に協働できるパートナーづくりをサポートする活動を続けたいと考える。

## ● プロフィール ●

につた・かおり 神戸大学文学部英米文学科卒、カリフォルニア州立大学ロングビーチ校言語学修士。  
2019年3月に近畿大学総合社会学部退職。現在は非常勤として留学を志す学生への授業を担当。特定非営利活動法人アイユゴーにて日越学生協働プロジェクトを担当。JAFS国際文化交流事業委員長。

## JAFS 会員綱領

私たちは、世界の平和と人間の基本的人権を守るために人々との「友情と信頼」に基づく「理解と協力と連帯」の輪をアジアと世界に広げます。

かかる目的をもって私たちJAFS会員は以下のことに努めます。

一、より人間らしい地球社会の創造をめざします。

一、アジアと世界の人々の幸せに奉仕します。

一、地球の自然環境を大切に守ります。

一、生活の無駄を省き、地球資源を大切にします。

一、これらの奉仕活動を通して、自分と他人の生命の価値を高めます。

以上



# ネパールへの かけ橋つとめ 20年

JAFSには、活動国のことを理解し、持続可能な体制を維持するための国別支援グループがあります。その一つ、ネパールへのかけ橋（通称「ネパ橋」）が2000年の創立から今年で20年を迎えます。約10名で始めた活動が、メンバーは変わりながらも輪を広げてグループメール登録者が80件を超え、いろいろな形でさまざまな深めてきました。そのネパ橋の人たちが、これまでの活動の軌跡をたどると同時にネパールの現状を改めて確かめるため、2019年12月28日から8日間、同国シンドウバルチョーク郡にワークツアーをしました。20年にわたる交流が何をもたらし、何が課題として新たに現えてきたのでしょうか。現地を訪問した参加者たちがリレー報告します。



伝統的水場をモチーフにしたオブジェの前に集った日本からのツアー参加者と揚水システム工事スタッフ。ネパールのスタッフがJAFSの文字を石で描いてくれた＝1月3日、インドラワティ村のJAFSの活動拠点

## 活動の成果と 課題見据えて

ネパ橋のツアーの一行は、設立時からのメンバーで代表の岡田光浩さん一家と、社会人で休日にネパ橋の活動に参加している人、地域を通じてネパ橋の活動に参加している人、音楽を通してネパールとのつながりを持つ人ら大人9人子ども3名。それにJAFS姫路の荒川鉄也さんが、地区活動で贈って完成した井戸を実際に見たいと参加し、JAFSからは熱田典子スタッフが行きました。さらに現地の提携団体であるAFSネパールのメンバーも加わり、総勢20名となりました。

### 子どもたちの輝く目に 次代を担うエネルギー

ネパールはアジアの中でも変わらぬ国と言われています。国政が不安定だったこともあるでしょうが、変わることが難しく厳しい環境があるからかもしれません。

ざしに、教育プログラムがしっかりと創造されれば次の時代を担う世代が育ってくるエネルギーを感じました。

しかし、山間部の小中学校になると、日常生活の中でまだ水くみ子どもや女性の仕事となっており、学ぶ機会を労働が奪っていることも直に知ることができました。

（JAFS 姫路 荒川 鉄也）

### まだまだ救えていない 子どもがいるのを痛感

最初に向かったのは、ネパ橋の設立時から関わっているチュニケル村です。カトマンズ中心街から車で30分の郊外にある農村地帯です。

サックス奏者の清水利香さんが、子どもたちを勇気づけようと、2015年の地震被災後3回目となるミニコンサートを、この村のナウリンセカンダリースクールで開いたのです。この学校でサポートしているアジア里親の会の里子たちに会うことも目的でした。

現在は立派な家が村のあちこちに見えて発展を感じるので、都会から近い辺境地でした。土地を持たない農民が高台に集落を築いています。その日暮らしの家族が多いことに加え、仕事を求めて山間地域からカトマンズに出てきた一家の移住地にもなっています。家賃が安いので、この村に集まってくるようです。コンサート会

場は村で唯一の公立学校で、そのような子どもたちの受け皿にもなっています。

ネパ橋では、グループでも、またメンバー個人でも、何人かの里親をしています。私もネパ橋への参加がきっかけで里子を1人支援しています。

どこにいるかな？と、清水さんの演奏中にキョロキョロと里子を探していたら、「後ろから3番目にいますよ」と先生が教えてくれました。成長ぶりに驚かされました。いつも恥ずかしそうな笑みで迎えてくれます。大変楽しみです。何より里親制度で、多くの生徒が学校に来ることができています。

でも、全てを救えてはいないこと、今もまだ学校に来られない子どもがいることを今回、この地出身のナニマヤさんから聞いて知りました。学校に来ているから必ず未来の可能性があるとはいませんが、来られない子どもは絶対的に将来の可能性やチャンスが遠のき、その宿命を背負ってしまう。校庭に並んだ列のデコボコを見ると、来られない子どもを思い、その思いを一層強くしました。

（ネパ橋会員 渡辺 治彦）

### ビマラさんの志を広げ 地域保健に尽くす病院

チョータラ村は、JAFSが産婦人科病棟を建設した場所です。ビマラさん

んは、国立チョータラ病院（シンドウバルチョーク郡内唯一の公立病院）内の産婦人科病棟の建設をきっかけに助産師・看護師となり、同村とその近隣地域の母子保健の向上に努めてきました。その関係で2度、大阪の助産院で研修を受け、日本で学んだ助産師の知恵とケアをネパールの自宅出産リスクの軽減に生かしてきました。ネパールでビマラさんに会ったほとんどの人が、彼女の大阪弁に驚かされます。その思い出の病棟を訪問しました。

産婦人科病棟は2000年のマオイスト内戦時に攻防戦の舞台となり、取り壊しを考えた時もありましたが、建設当時のことをよく知るドクターの計らいで修繕されました。15年の大地震時、病院本棟は倒壊しましたが、この病棟は平屋建てのため、少し亀裂が入った程度で済みました。本棟の再建がまだである現在は、病院の手術室として郡全体の人たちの命を預かる大切な場所になっているとの話を聞きました。役割は違えど、地域保健を守るのに30年以上も役立っていることに驚かずにはいられません。

現在、ビマラさんは別の病院に勤務していますが、彼女の意思が広がって若い世代が保健の問題に取り組み、それをビマラさんがサポートしています。時代が変わっても保健の課題はネパールにはたくさんあります。その視点を私たちの活動に加えてくれた地が



ナウリンセカンダリースクールの生徒たち。コンサートを開く清水利香さん（中央の楽器を持った人）ら一行を笑顔で迎えた＝1月1日、チュニケル村



ここであることを再確認できました。  
(JAFSスタッフ 熱田 典子)

## 井戸使う村人の笑顔が私に喜び運んでくれた

JAFS 姫路がクンチョーク地区に贈った井戸（共同水場）を訪問しました。同地区はチョータラ村からインドラワティ村ボテシバ地区への途中にあります。2015年の地震で水脈が変わり、水が枯れて生活できない状況に陥り始めたが協力要請を受け、小規模の水道パイプラインを設置しました。

学校の子どもたちからの大歓迎を受けました。子どもたちがうれしそうに水を飲んだり手を洗ったりしている姿がつい半年前までは夢であったと先生から聞き、子どもにとっても大人にとってもかけがえのない水を得られたことを、我々も実感できました。

訪問の一番の目的は「地区活動を通して贈った井戸がどのように使われているか？」でした。井戸は山の尾根筋の小学校の横にありました。地震で被害が大きかったこの地域では、歩いて30分の地点にあった水源が枯渇し、水を得るのに2、3時間もかかるようになってしまったとのことでした。

水源から大きな集水タンク（1万2千ℓ）に水を引き、それを数km離れた400人以上が住む各地区の井戸に配るといった方法をとっていました。午

できました。  
(JAFSスタッフ 熱田 典子)

## 頼もしい現地スタッフ 私たちの失敗をばん回

ネパ橋は、学校と子どもに関する多くの取り組みを行ってきました。ワークキャンプは45回を重ね、ほぼ毎回のメニューに何らかの学校関係行事が入っています。支援先は12校、ワーク参加者は延べ380人、当初は若い世代が多く、ときとともにメンバーは入れ替わりましたが、それぞれが貴重な経験と感動を得ることができました。

活動内容は、現地からの要請とチームで考えた案を組み合わせた多様なもので、校舎のペンキ塗り（ちゃんと絵も描きました）、校舎・トイレの補修、掃除……。教室では、定番の環境教育や食物の栄養教育をはじめ、ワーク参加者が考えた折り紙、習字、工作・図画、歌と踊りなど、日本から持ち込んだ出前授業をしました。日本の食物もいろいろ味わってもらいました。

子どもたちの期待と注目のまなこに出会って緊張しますが、言葉が通じなくても共感と達成感が得られました。今回も三つの学校を訪問しました。一つ目のチュニケル村はカトマンズからも近いこともあり、よく訪れます。年々、生徒が増え、以前は2階建てだった校舎が今は3階建て。各教室は日本

前3時間、夕方3時間の出水制限をしないとタンクには水が貯まらないとのこと。出てくる量も勢いよくとは言えません。でも、これで水くみの仕事から解放されたことは間違いありません。利用する人たちには満足そうな笑みが見られました。この笑みは、長年活動に取り組めたことへの喜びを私に運んでくれました。

(JAFS 姫路 荒川 鉄也)

## 揚水システムの建設も組織をあげてお手伝い

インドラワティ村は、シンドゥバルチョーク郡内で最も乾燥した地域で



揚水システムの取水タンクを、ツアー参加者たちがペンキ塗り＝1月2日、インドラワティ村

の各団体からの寄贈で、銘々のプレートが掛かっています。いろんな方や団体の顔と歴史が浮かんできます。

机と椅子は古いままです。それも、低学年から高学年まで同じ。さすがに上のクラスは窮屈そうです。

最終日に訪れたのはボテシバ村の山間の尾根にある学校でした。季節風が吹き抜け結構寒かったです。古い校舎に新しい校舎を増築したとのことですが、こちらも手狭でした。予算がないとのこと、窓ガラスはなく校庭もデコボコのまま。でも、子供たちは気にもしてない様子です。元氣、元氣！

夜にはたくさん星が見えるのとことで、「星座の出前教室」を試みましたが、残念ながら不評でした。こちらでは星座ではなく、星そのものを対象しているそうで、文化の違いを実感しました。しかし、2名のAFSネパールのスタッフが、傾いた出前教室を「星の勉強会」に立て直してくれ、子どもたちも納得してくれました。感謝！非常に頼もしかったです。現地スタッフの今後の活躍が楽しみです。

以前に比べ、学校施設や教育内容は少しずつ良くなっていますが、まだまだの所も多いです。現地のスタッフや学校の先生と「次に何をすべきか？」を話し合って活動が続けていきます。「ネパールへのかけ橋」の発展に期待ください。

(ネパ橋会員 渡辺 治彦)

す。JAFSとは飲料水支援で関わりが始まり、大地震以後は支援活動の中心地になっています。これまでネパ橋が他の地域で実施してきたことを総動員して、その一歩先の活動を、村の人たちの意向に合わせながら実施していきます。大規模揚水システムの設置プロジェクト＝本誌138(2019年夏)

号などで詳細＝もその一つです。実施に踏み切れたのは、ネパ橋をはじめ、これまでネパールと関わった多くの人たちの経験と知恵があったからです。揚水システムはネパ橋にとって

も関心が高く、現地からの要望書を当初から、知識を持っているメンバーが見て相談し、確実な計画へと仕上げて

いきました。

今回のツアーでは「実際の作業に関わりたい」と言って、本誌今号の表紙写真に載っているようなパイプライン接続を希望する声が多かったのですが、パイプは金属製で1本の長さ3m、重さが70kgもあり、現場も山地で危険なので断念。そちらは見学に止め、その代わりに取水タンクの仕上げ作業をしました。タンクの強度を上げるためのペンキ塗りですが、「これまでは規模が違うね」と、塗っても塗ってもなかなか終わらない作業に、今までの事業とは違う規模の大きさを感じていました。

パイプラインの全ルートを視察し、確認もしました。故障時の対応確認や、工事現場の安全面のアドバイスなど、ネパールの人たちに良い刺激になったと思います。このような機会を通して、日本人が関わることの良さを学んでほしいと感じました。

ツアー参加者のもう一つの大きな役割は、作業員が寒さの中でも安全に作業できるように、衣類、靴、テントなどを現地に運び手渡すことでした。その1か月半前、重いパイプを運ぶ作業員の足元がビーチサンダルで、寒さで風邪をひいたり発熱している人が続出しているのを見て、アウトドア用品メーカー株式会社モンベルに協力を仰ぎ、寄贈が実現しました。おかげで安全対策が万全になり、作業環境を改善

## バザーで資金を集めて毎年1事業

## ワークキャンプはまずトイレ設置

「ネパ橋」  
創立の頃

ネパ橋創立の頃、JAFSでは国際ワークキャンプが活発に行われ、インドやフィリピンなどでは、その経験者らが継続的に交流を持てる場としてファミリーグループが作られていました。しかし、ネパールについては、そうした場がまだありませんでした。

そんな頃、AFSネパールのボランティアメンバーで、ネパールで助産師をしていたビマラさんが来日し、ネパールワークキャンプに参加した人たちを集めて懇親会をしました。そこに集った人たちが話し合い、2000年12月にネパ橋の創立準備会をしました。そして「ネパールの子どもたちの力になる」を一番の目的として、バザーに参加して協力を集め、学校の校舎やトイレ建設、給食サポート、教育里親など毎年何か一つ、JAFSがしているネパール事業を支援してきました。

当時のネパールは、人々の暮らしぶりから、日本の昭和40年代のような懐かしさを感じられました。村ではトイレが整備されていない所があり、ワークキャンプ時は、まずトイレを設置するような状況でした。穴を掘って囲いを作っただけでしたが、星空を眺めながらトイレするのも気持ちよかった記

憶があり、今では懐かしく思います。

電気も十分に整備されておらず、宿泊先では配線して電球を設置して照明を確保しました。でも当時は日本でもスマートフォンもデジタルカメラも普及していなかったため、ネパールで電気がなくても全く不便だと感じることはなかったです。現在では、スマートフォンが日本もネパールも普及し、ネパールで計画停電が続いていた頃は、電気が来ているときに皆が充電しようとしてコンセント確保が大変でした。

昔はカトマンズ市内では、排気ガスでマスクがないと、のどが痛くなるほどでしたが、現在は排ガス規制などにより改善されてきています。

最近一番感じるのは、ヒマラヤ山脈の景色の変化です。20年前は山頂部は白く輝き、大変きれいでしたが、今回、ツアー初日に訪れたポカラでは温暖化で雪が解け、黒っぽく山肌が見えていました。少し悲しくなりました。

2015年の大地震で倒壊した世界遺産の古い建物の復旧と、ネパールの観光資産であるすばらしい山々の景色が、いつまでも美しく保たれることを期待したいと思います。

(ネパ橋代表 岡田 光浩)



JAFSはネパールで1989年から、森作り活動の一つとして植林に取り組んできました。森の面積が減ってきていることも理由ですが、それよりも、人々が持続的に生活できるために農業を成立させる必要があるからです。農業の成立には、農地の倍の森林が必要とネパール森林省は公言していました。自然の豊かさは農業生産に大きく影響するのです。

ネパールでは、1990年には国土の34%を森林が覆っていましたが、2005年に過去最低の25%となりました。最新である16年のデータでも25%。森林減少が大きな課題となつて以来、コミュニティフォレスト（住民参加の森）制度を導入し、国家も民間もさまざまな植林活動をしています。10年以上横ばいです。家庭の主燃料が依然としてまきであることに加え、主産業の観光業のエネルギー源にもまきを大量に使うことや、人口増加による森林開拓、そして一部の人が私腹を肥やすために木を伐採して密輸出することなどが、原因と考えられています。

こうした中で私たちJAFSは、多くの失敗を繰り返しつつも、本当に地域が一つになるとき植林活動は成功するということを実感しています。

二つの村でのケースを紹介します。



地域の公園づくりのため実施した植樹祭＝  
2019年8月、インドラワティ村

## 村の生活を支え 治水にもひと役

◆ノールパラシイ郡ピトゥリ村

2000年に植林を始めました。初めは、森ができるなど多くの村人は信じていませんでしたが、植林委員会を中心に村人が汗を流し、5年後には森の形成が始まりました。さらに数年後から、木とともに、村人の生活に必要な草が地を覆い、まさに生活を支える森がつくられていきました。

一方、森のすぐそばを流れるナラヤ

二川がしばしば氾濫することが悩みでした。そこで川岸に土を盛って土手をつくり、そこにJAFSが植林しました。村全体を守るコミュニティフォレストができ、洪水防止に大いに役立ちました。このことが今、村の誇りになっています。

## 公園づくり通じ 村人が意識改革

◆シンドウパルチヨーク郡インドラワティ村

現在、挑戦しているのが、2015

二川がしばしば氾濫することが悩みでした。そこで川岸に土を盛って土手をつくり、そこにJAFSが植林しました。村全体を守るコミュニティフォレストができ、洪水防止に大いに役立ちました。このことが今、村の誇りになっています。

グラムなどについて話し合い、エコロジカルスクールのこの10年間の歩や、近年の山や海の植林への取り組み、地

球環境へのつながりについての活動が紹介された。

パナイ島南部のシバロン市からも、副町長が新宮市の土水に参加したこと

をきっかけとして、子どもたちの環境教育に力を入れ始めたこと、また、丘陵地帯のシバロンでは環境と農業のつながりが深く、環境教育が重要であることが報告された。特に市議会の農業委員長が新宮市での土水に強い興味を持つっており、今年予定されている第37回へ参加を希望した。将来はシバロンの子どもが新宮で、新宮の子どもがシバロンで、それぞれのプログラムを体験できるようになればうれしいとの提案もあった。

一行は、シバロン市のシドサンファン小学校を訪問した。学校の中に子どもたちが実際に作業を体験できる農場や畜舎、池などがあり、日常の授業でも環境教育ができるように工夫されていた。農場の中に教室（寺子屋）があり、継続的に環境について学べるようになっていた。同市内にあるカゼニヤスメモリアルスクールは、熱心な環境教育が話題となり、環境保全への取り組みのモデル校として地域の学校に影響を与えているという。

「エコロジカルスクール」という言葉は、フィリピン版土水だけでなく、さらに広い環境教育すべてに使われるようになってきている。

（JAFSスタッフ 岡本佳子）

## 「土水」の輪、海外に広がる

### フィリピンでエコロジカル・スクール

「クリーン・アンド・グリーン・エコロジカル・スクール」という催しがフィリピン、パナイ島パンダン町で2月7日から5日間開かれた。JAFSが毎夏、和歌山県新宮市で同市と共催している「土と水と緑の学校（略称「土水」）のフィリピン版ともいべき催しだ。日本から田岡実千年・新宮市長と土水の講師、JAFSの村上公彦事務局長らが招かれて出席し、未来を担う子どもたちへの自然環境教育について、現地の行政機関、学校関係者と活発に意見交換した。

「土水」は、自然に接することが少なくなくなった青少年たちを熊野の大自然の中に開放して生命の大切さ、尊さを伝え、あらゆる生命体が共存できる社会をつくれる人たちを育てようという狙いで、1984年に始まった。次世代への環境教育を目指してJAFSが提唱している国際グリーンスカウト運動の一環でもある。

近年は、アジア各地の提携団体からも訪問・見学が増えている。特に、25周年を記念して2008年に開いたアジア自然環境シンポジウムで、アジアの各地の関係者を招いて話し合ったの

を契機として、未来を担う子どもたちへの自然環境教育の必要性が強く認識されるようになった。

パナイ島パンダン町では、この会議へ参加したことをきっかけに、ぜひ自分たちの地域でも同じような学校を開きたいという声が高まり、同年から早速クリーン・アンド・グリーン・エコロジカル・スクールを始めた。

2012年の土水に同町のサンチェス町長（当時）が参加したのを契機に、環境保全の活動を地元行政からも支援することになった。この活動の推進者の一人で、当地の教育長であるジェネロッサ・コンデス博士は、各地町村の学校関係者に働きかけ、環境教育プロジェクトを課外活動に取り入れるように奨励してきた。

今回の会場になったパンダンセントラルスクールでは、パンダン町長、同副町長、AFSパンダン代表、水道局局長が新宮市長の一行を迎えた。パンダンの子どもの環境教育と実際のプロ



自然環境教育について意見交換。左から4人目がサンチェス・パンダン町長（10月再選）、5人目が田岡実千年・新宮市長、6人目がコンデス博士、7人目が村上公彦・JAFS事務局長。2月8日、フィリピン、パンダン町



# マングローブで津波を防いで命を守る

1月10日から16日まで、インドネシア・アチェ州へのワークキャンプツアーがありました。このワークキャンプは昨年到现在2回目です。今回も、現地での植林や交流会、学校訪問は、現地の提携団体AFSアチェのウイナさんが手配され、ガイドのユスフさんとともに案内してくれました。今年の主目的は、昨年と同様にマングローブ植林と環境教育です。

まず到着した日の夕方に、植林予定地を見に行きました。昨年との違いは、苗木が既にトラックに載せてあり、植林予定地まで運んでもらったことと、昨年の植林地は牡蠣殻に覆われていて掘るのに大変でしたが、今年は砂地であったことです。ただ、初めは1500本も果たして植えられるのかなあと感じました。

翌日、植林地が満潮の時は海水に覆われているため植えられませんでした。午後、干潮時に行きました。既に、地元の高中生、女子学生や各NGO関連の人が総勢65名も集まってくれていました。地元の河川関連省庁の長官のごあいさつの後、日差しがきつかったですが、植林を開始。地元の人慣れているのか、よく働いてくれました。日本から行った6人もへとへとになりました。

今後、海岸でマングローブを植える努力もしながら、地元スタッフや農家の協力も得て地球上の大半を占める海の上にも植林ができないかと考えています。具体的には、今年初めて竹筒を使った植林を試験的に行いましたが、来年は育ったマングローブを沖合に移し、イカダの上で育てる計画を実行したいと考えています。計画が成功すれば、海水温度が下がり地球温暖化防止にも役立つと思います。

さて昨年の環境教育では、マングローブの木に絵を描き、根元に海の生き物の絵を描き、マングローブの果たす役割（プランクトンや小魚の隠れ家になり、餌が増え、木が二酸化炭素を吸収し、酸素を出す）大切なことを色々学んでもらいました。

今年は、それを踏まえて、環境汚染につながるゴミのポイ捨ての問題や、マイクロプラスチックが引き起こす人体への影響を考えてもらいました。

波や紫外線で砕けたプラスチックは、元々、石油製品なので、同じ石油からできたPCBやDDT、ダイオキシンなどがくっつきやすく、食物連鎖の頂点にいる人類が濃縮摂取してしまうのです。影響は未知数ながら、肝臓にたどり着くと、癌を引き起こす原因

# 海洋プラスチックごみ問題を共に学ぶ

JAFS会員 伊藤 勝、鳥居 建十、杉本牧子

## インドネシア、アチェ

## 植林と環境教育ワークキャンプに参加して



小学校で、海を汚さないにはどうしたらよいか考えるワークショップ=1月13日、バンダ・アチェ市



総勢65名のボランティアが500本のマングローブを植えた=1月11日、バンダ・アチェ市

がら、夕方までにはなんとか全て植えることができて良かったです。

この植林プロジェクトはそもそも、22万人以上の死者・行方不明者を出した2004年12月26日のスマトラ沖大地震による大津波で、アチェの町が大きな被害を被ったことから、津波の被害を少しでも軽減するために2006年に防潮林をつくろうとしたのがきっかけです。津波で、海岸に植わっていた松やマングローブの木も根こそぎ倒されてしまったのです。

換金食物としてエビの養殖が盛んになったため、木を伐り池を作り、切り倒したマングローブが薪として売られていました。そのため被害が余計大きくなったのです。「元の豊かな緑の森を復活させ、再度地震・津波被害があっても最小限にする」というウイナさんの強い意志を感じました。

津波の平均速度は時速770kmとジェット機並みで、海の深い所ほど速く伝わります。水深が浅くなるにつれ速度は遅くなるので、減速した波の前方部に後方が追いついて波高が高くなります。抵抗が大きくなると津波の速度は遅くなるので、マングローブを多く植えることによって津波の速度を遅くし、その間に安全な場所へ人々は避難することが可能になると思います。毎年、マングローブを植林することがが少しでも多くの人命を守ることにつながります。

になるかもしれないです。訪問した小学校では、単に話だけでは記憶に残りにくいのので、「紙芝居」を作ってお話したり、身の回りの環境の絵を、一人一枚ずつ配って良い行い・悪い行いを、付せんに書いて子どもたちに発表したりしてもらいました。

インターナショナルスクールの中学生には、環境を守ることの大切さを考える「紙芝居」を作ってもらいました。それを他の国へも持って行き、環境の大切さを共有するために活用していきたいと思っています。自分の問題として主体的に関わって欲しいと思っています。

一方、世界的に、レジ袋禁止の動きがあり、代わりに布袋を持参しましょうという傾向になってきていますが、かさばって常時持ち歩きにくいのが問題です。それを解決する手段として、日本伝統の「ふろしき」を復活させようと考えました。種々沢山の包み方があり、その具体的な方法を実演して紹介しました。今後はこの取り組みを、各NGOにも協力してもらい、SNSなどで世界中に普及させるのが、私たちの新しい課題です。

\*本事業は、公益信託地球環境日本基金の助成金により3ヵ年計画で本年は2年目です。来年1月には、3年目のツアーを予定していますので、関心がおありの方はお問い合わせください。



# 近大生がカンボジアの子たちの夢を応援



国際交流プログラムで7年生（日本の中学1年生）たちと一緒に「夢」について話し合い、寄せ書きに書いてもらった＝2月22日、カンボジア、カンダル州サン地区のプレックアンベル中学校

サイクル・エイド事業で大阪から贈られた再生自転車車の寄贈式が2月21、22両日、カンボジア、カンダル州サン地区であり、近畿大学国際学部の子生たち5人が参加して地元の子どもたちと交流した。学生自身が企画した国際交流プログラムで、多くの子どもたちにサイクル・エイド事業について知らせ、日本の文化を体験してもらった。

学生たちは自転車を買った村にホームステイし、子どもたちと一緒にインタビューした。また地区の中学校

も訪れ、生徒たちに将来の夢を書いてもらった。「村に教育を届けたい」と願って先生になりたいと言う子どもがとて多かった。「村の人たちを助けたい」と医者を志す子、軍人や警官になって「村や国を守りたい」と言う子もいた。物が無い生活の中で、地域や国の平和を強く願っていることがわかった。家庭から出るプラスチックごみの処理が深刻な問題になっていることも、インタビューから浮き彫りになった。（JAFSスタッフ 岡本佳子）

## 子どもたちへの インタビューから

### 体が弱いので 医者になりたい

ボット・リザさん

（女・9歳・小学3年生）

父・母・兄弟3人で暮らしています。家は木とトタン屋根の高床倉庫のような作りで、すき間がたくさんあり、排水設備はありません。大雨の時の洪水が大変で、自然災害の被害が大きいのも貧しさから抜け出せない理由の一つです。両親は卵を売る仕事をしています。放課後は、掃除や兄弟の世話や料理をします。自転車は学校に行く時だけでなく、家族みんなで物を運ぶためにも使えるので、自転車を受け取ることができてとても幸せです。好きな科目は数学。将来の夢は医者さんになることです。なぜなら自分も

体が弱く病気になるがだからです。

## 警察官になって 力をつけたい

チネアン・テアラさん

（男・13歳・小学5年生）

母が死んで、父が出稼ぎに行っているため、現在は祖母と弟と暮らしています。学校が好きで、すべての科目をもっと勉強したいのですが、お金を稼ぐために、放課後は牛の餌やり、玉ねぎの仕分けなど家事を手伝います。自転車は通学時間を短縮できるだけでなく、牛の餌を運ぶのにも使えるので、助かってすごくうれしいです。将来の夢は警察官になること。力をつけて強い存在になりたいと思っています。

## 兄弟の世話を して就学が遅れた

ゴック・チャン・ドウエンさん

（男・12歳・小学3年生）

父が死んで母が働きに出ているので、僕が兄弟の世話をしていました。そのため学校に通う時期が遅れ、年齢と学年に差があります。弟が大きくなってやっとな通学できるようになり、今学校生活を楽しんでいます。好きな科目は数学。放課後は兄弟の世話や畑仕事をして家計を助けます。自転車は学校に通うだけでなく、市場に行くのに

も使えるので、とても幸せです。夢は警察官。力を持っているからです。

## 家計を助けて 一生懸命に布作り

カット・ダビンさん

（女・14歳・中学2年生）

時間割によって、学校が始まる時間

が朝から昼からかわります。終わりは18時ですが、補講を受けると、家も遠いので20時頃の帰宅となります。帰宅後はビーズを縫い付けた布を作っています。ほかに玉ねぎを分ける作業などしています（昨年は玉ねぎが売れなかったから牛を1頭売った）。休日にも布を作ることに専念し、1週間で作り終えるように励んでいます。

もし間に合わない場合には、いつもより早く起きて縫い、さらには学校を休んで布を作り、家計を助けています。野菜や穀物よりも高い収入が得られますが、布を売ることができるとは、目がいい若い間だけです。布の縫い方は、人（市場の営業者など）が村にやって来て1週間指導します。母は小さな料理屋をしていて、バナ

ナを揚げたものなどを売っています。（村にペットボトルなどのプラスチックゴミが見受けられたので、ごみをどのように処理しているか聞いたところ）家が出るゴミは野菜ゴミといっしょに燃やしています。※この事業は、競輪の補助を受けて実施しました。

# アジア・フレンドシップ財団発足へ

アジアから貧困をなくそうとの理念のもと、現在本会（JAFS）が推進中のアジアのネットワーク組織、AFS（アジア友の会ネットワーク、18カ国70地域）の活動をより実効性のあるものにしていくために財政の継続的な支援が必要です。長年にわたり、この問題の有効な方法を検討してきましたが、この度、AFSネットワークの有意なビジネス関係者（主として、インド）から、AFSの国際的応援団、「アジアフレンドシップ財団（Asian Friendship Foundation for charity = AFFC）」（主として、アジアの実業家、医師等専門職能人を中心に構成）の構想が具体化し、その具体的な発足に向けて

## 人材育てる資金づくりへ

一歩踏み出すことになりました。これが実現すれば、アジアにおいては画期的なことになります。この具体的会議（発足会）が2月後半に予定されていましたが、残念ながら、コロナ・ウイルスによる新型コロナウイルス流行のために無期延期となりました。そこで、これまで準備万端手配を進めてきたタイ側の強い意向もあり、非公式に有志が集まり、2月25日、バンコク郊外のヴァンターッジ・ゴルフクラブにおいて、ゴルフ愛好家の実業家を中心に、顔合わせ会を開催しました。総勢約60名（主として、タイ人と在タイ日本企業社員、日本国内からは10名、インド3名）が参加し、交流・懇談の時

を持ちました。これを契機に、今後の展開が期待されることです。日本側からの積極的参加も望まれています。この基金の狙いは、「アジアの貧困をなくそう」を基本課題にして、アジアで行なわれるAFSの人材育成の国際的活動、アジア国際ネットワークセミナー、アジアユースサミット（AYS）、海外提携団体のスタッフ育成奨学金などの人材を育成するための資金をつくることです。この基金を中心に実業家同士の横のつながり（国際的人脈）もできていくことと思われま。

（JAFS専務理事兼事務局長 村上公彦）



# 学校―少数民族の子が生きる新たな道

RUDYA代表(インド) カシナート・デオガデ

インドのマハラシュトラ州ガッチオリ県にある日印友好学園パダトラ小学校は、少数民族の子どもたちにとって新たな生きる道となっています。

教育は私たちの日常生活で大きな役割を果たしています。インド憲法の起草者であるババサヘブ・アンベードカル博士は「教育というのは、社会的

奴隷制を断ち切るための適切な武器であるとともに、虐げられた大衆が社会的地位、経済的改善、政治的自由を得ることが可能になるために啓発するの

も教育である」と言いました。インドでは、マハラシュトラ州のマラーター宰相統治時代、さらに英国統治期間の初期にさえ、教育を受ける権

パダトラ小学校の校舎の前で先生・生徒たちと。前列右端が筆者のカシナートさん



利は高いカースト階級に制限されてきました。インドの社会改革者は、カーストと性の差別なしに大衆が教育を受けられるよう闘ってきました。私たちは教育が、不可触民(カーストにも入れない最下層の人々で差別の対象になっていた)が知識の分野で卓越するた

せんでした。ガッチオリ県は、インドのなかで少数民族の地域として知られ、76%の土地は深い森と丘陵に覆われています。この少数民族は、ほとんどがマディヤ族です。森林地帯の奥深くに住むマディヤ族の人々は、暮らしを農業、狩猟、森林の産物に依存しています。独自の文化を持っており、村の長(パティール)と伝統医術をする祈禱師(ブジャリ)を信じています。

知識は解放力です。教育は人を啓発し、自尊心に目覚めさせ、物質的に良い生活をおくるのを助けます。不可触民が最下層にとどまっている原因の一つは、彼らが教育を受ける権利を拒否されたことでした。インドの独立(1947年)後、長くたって、

をより良くするために、私たちの今日を犠牲にしましょう」と言っています。彼は子ども福祉に焦点を当てて、親・学校教育者・年長者・指導者・社会の重要性和差し迫る必要性をと

は、6〜14歳の全ての子どもは無料で義務教育を受ける権利があり、それを保障するのは州政府の務めです。法律が施行されましたが、両親が教育の重要性に無関心であったし、都市部出身の教師たちは教育のために森林地帯の奥深くまで行くことに興味がありませんでした。

成長するための適切な機会と環境が提供されている場合、子どもたちは人生で驚くほど力強いことができます。それで私たちは、活動地域で学校施設がない所に小学校を開校することにしました。RUDYAの元代表ブラザー・T・シンは当初、パダトラ村に英語で教育する学校を開設しようと、日本

▼16ページに続く

▶ Continue to page17

us sacrifice our today so that our children can have a better tomorrow" He wonderfully highlight the importance and dire need of parents, school educators, elders, leaders and society focusing on the welfare of children. Our little wonders, our kids are truly capable of mighty things in life; if they are provided with the right opportunities and proper environment to grow. So we decided to start primary school in our working area where school facility was not available. First Bro.T .Singh had started convent (English medium school ) at Padatola and make the school building with help of JAFS,Japan but this convent did not secure Government permission and with the consent of Bro.T.Singh and JAFS, JAPAN we had submitted proposal of primary school to the Maharashtra Government on 25th March 2002, fortunately we got success to get government permission, according to Government letter dated 25 March 2003. As per the Government permission we started 1st standard in 2003 at Padatola. Padatola village is situated in very remote area, every year we are upgrading school and within seven years, We reached up to 7th standard. Which is called middle school, 1st standard to 4th standard is called primary and 5th to 7th standard is called middle school and we have completed our 15 years successfully and our first

## Indo-Japan Primary School, Padatola is a new way of life for tribal children

Kashinath Deogade

Executive Director of Rural and Urban Development Youth Association (RUDYA), Gadchiroli, Maharashtra, India

Education plays a major role in our daily life. so Indian constitution maker ,Dr. Babasaheb Ambedkar said that, "It is the education which is the right weapon to cut the social slavery and it is the education which enlighten the downtrodden masses to come up and gain social status, economic betterment and political freedom"

In India during the Peshwa rule in Maharashtra and even during the earlier period of British rules, right to education was restricted to higher castes/classes. Indian social reformers fought for the education of masses without discrimination of caste and sex. We believe that education would greatly contribute to the improvement of the untouchables, so they should reach excellence in the field of knowledge. Knowledge is a librating force. Education makes man enlightened make him aware of his self respect and also help him to lead a better life materially. One of the causes of the degradation of untouchables was that they were denied to right to education. Afterlong time of Independence India, Indian Government passed the, Right to education Act, 2009. According to this act, it is duty of state Government to ensure that every child between 6-14 years is entitled to free and compulsory education. Even this Act came in to force but due to unawareness of parents of about importance of education and teachers are from city area and they are not interested to go deep forest area for teaching. Our Gadchiroli District tribal children were not fortunate to take education. Gadchiroli district is known as a tribal district of India, where 76% land covered by deep forest and hilly area. Where our tribal people are living they mostly are 'Madiya' tribes. Madiya tribal people living indeep forest area, their livelihood depends on agriculture, hunting and forest product for daily life. They have their own culture. They believe in patil (The chief of the village) and pujari (who is traditionally doing health practice)

As I told before tribe people are not aware about education and we as social worker, itis our duty to bring them in development stream, but without education it is not possible. Indian former President Dr. A.P.J. Abdul Kalam has said,"Let



batch students are studying in university for bachelor degree. It all could possible because of JAFS's kind help.

### Current Situation of School

Out of above 83 students 55 students are staying in school hostel. Above all students are from different villages they are from following villages.

Padatola & Kudurshitola these two village are native villages but other villages are Abapur-10km, Mudhulitola-10km, Garanji-40km, Karmetola-45Km, Navegan-55Km, Bhasmatola-55km, Vengnur-40km and Ykallpur-55km away from school village padatola,out of above students 95% are from tribal community. As I mentioned above we have up to seven classes where lot of information about the world and events, languages are taught in school education. Science, History, Geography, environment, are included as subject in the school education and sport, dance, singing, vegetable gardening, are includes in other activities. This school is very unique school, where our teachers are taking care for overall development of students. Our school students are from tribal community and their mother tongue is Madiya, so our teachers getting problems while teaching languages and mostly our tribal students are good in math, English, sport, dance but they are not good in Marathi language& science .

### Improvement : Story of Mr. Lakhan Bajirao Hichami

Mr.Lakhan Bajirao Hichami is from Garanji Village which is 40km away from our school which is situated in deep forest area. Mr. Lakhan's date of Birth is 03July, 2002 he has father, Mother & one younger sister, and his parents are illiterate. They mostly depend on Agriculture, and forest for daily life. Mr.Lakhan Bajirao Hichami came to school in education session year 2004 for Nursery, when he was 3years old. He was very young as his age and was living in hostel with our other students.He was very good by nature and very good in study& sport activities.Actually when he came to our school he did not know Marathi regional language, but within one year he learned Marathi language. He was taking interest in Math &English; he improved day by day in other subject also. He has graduated from our school in 2013-14. After his 7th class he joined for his further study 8th to 10th in Government Ashram School Bhadbhidi, he had passed SSC (Secondary School Certificate Examination) Board examination with good Marks and he went to Ghot for his junior college (11to12) education at Mahatama Gandhi junior college Ghot. Now he is in Standard XIth .He is studying hard



| Class wise studentisn<br>2019-2020 |                      |
|------------------------------------|----------------------|
| Class                              | Total Class Students |
| 1st                                | 10                   |
| 2nd                                | 13                   |
| 3rd                                | 11                   |
| 4th                                | 8                    |
| 5th                                | 9                    |
| 6th                                | 10                   |
| 7th                                | 22                   |
| Total                              | 83                   |

and he want to become Doctor to serve his tribal community. He said because of Indo-Japan Primary school,Padatola he get chance to take an important education and changed his life. He thanks to JAFS, Japan, RUDYA,Gadchiroli and his foster parents, Ms. Chieko Nezu, Japan.

All above could possible to achieve our goal because of JAFS, Japan and our foster parents and respected donors' kind support & help. So behalf of our tribal poor people, students, we heartily thanks and sincerely gratitude for their help and we ask their support for further Nobel work of education. Thanks!



⑥生徒たちと一緒に校庭に植樹する  
カシナートさん ⑤現在のヒチャミ  
君。ジュニアカレッジに進み、医師  
になることを目指して勉強中だ。い  
ずれもインドのマハラシュトラ州ガ  
ッチロリ県

### 2019年度の生徒数

| 学年 | 生徒数 |
|----|-----|
| 1年 | 10  |
| 2年 | 13  |
| 3年 | 11  |
| 4年 | 8   |
| 5年 | 9   |
| 6年 | 10  |
| 7年 | 22  |
| 計  | 83  |

（翻訳：編集スタッフ 大本 和子）  
これら全てにおいて私たちが目標を達成することができたのは、JAFSと、里親や尊敬すべき寄付者の方々の親切な支援のおかげです。少数民族の貧しい人々や生徒を代表して、支援に心から感謝します。尊い仕事である教育のためにさらなるご支援をお願いします。ありがとうございます。

津千恵子さんに感謝しています。  
彼らは卒業後、公立アシラムスクールで8年生から10年生の勉強を続け、中学卒業認定試験SSCに良い点数で合格し、11年生から12年生の勉強をするためゴート村のマハトマガンジー・ジュニアカレッジに入学しました。現在、彼は11年生です。一生懸命勉強しており、少数民族社会に奉仕する医師になりたいと考えています。日印友好学園パダトラ小学校のおかげで大切な教育を受ける機会を得たことは、彼の人生を変えたと言いました。彼は、日本のJAFS、ガッチロリ県のRUDYA、そして彼の日本の里親である根津千恵子さんに感謝しています。

幼く、他の生徒たちと寮で暮らしていましたが、彼は生まれつき非常に優秀で、勉強とスポーツがとてよくできました。実際、彼は学校に来たときマラティ語を知らなかったのですが、1年以内にマラティ語を習得しました。彼は数学と英語に興味を持ち、他の教科でも日々進歩しました。そして13年度に卒業しました。

めに学んでいます。JAFSのご厚意により、すべて可能になりました。

### 現在の学校の状況

下表の83人の生徒のうち55人が学校の寮で生活しています。生徒は皆、さまざまな村から来ています。パダトラとクドウルシトラの二つの村は地元各村ですが、他の村は学校からの距離がアバプール10 km、ムドゥリトラ10 km、ガランジ40 km、カルメトラ45 km、ナベガン55 km、バスマトラ55 km、ベンガヌール40 km、イカルプール55 kmと遠く離れており、生徒のうち95%が少数民族です。

前述のように7年生までであり、世界について、行事について、語学など多くのことが学校教育で教えられています。科学、歴史、地理、環境が教科としてあり、スポーツ、ダンス、歌、野

菜園芸が課外活動としてあります。この学校は非常にユニークな学校であり、教師たちは生徒の全人的発達に目を向けています。生徒は少数民族出身で母語はマディヤ語のため、教師は語学を教えるときに問題に直面しています。少数民族の生徒はたいいてい数学、英語、スポーツ、ダンスが得意ですが、マラティ語と科学は得意ではありません。

### ラカン・バジラオ・ヒチャミ君の物語

ラカン・バジラオ・ヒチャミ君はガランジ村出身です。ガランジ村は私たちの学校から40 km離れており、深い森の中にあります。ラカン君は2002年7月3日生まれで、父親・母親・妹がおり、両親は教育を受けていないので文字が読めません。主に農業と森の恵みで日々暮らしています。

04年度にラカン君は3歳で幼稚園に入学しました。彼は年齢どおりとても



## 水くみがなくなり病気が減った

深い森の中の村で、モハの木の花（風邪用シロップ）、果物、種（油や河川浄化用）、蜂蜜、竹など森の産物や、米や野菜の農作物によって生計を立てています。井戸を寄贈いただく前は、古井戸と不衛生なため池の水を使っていましたが、乾季には干上がるため、遠くまで水くみに行くのが負担でした。井戸のおかげで健康・衛生状態が改善し、水くみの困難から解放されました。病気も減ったため、医療費を削減でき経済的にも少し楽になりました。感謝して末永く使います。



マハラシュトラ州ガッチオリ県ワナルチュワ村  
受益者…250名（65世帯）  
井戸形式…ポンプ式（深さ60m）

【寄贈者】唐招提寺 様

【寄贈者】樋口誠治 様

中部州キャンディ県コティカボラランダ村  
受益者…60名（15世帯）  
井戸形式…露天式（深さ7m）



## 長蛇の列の水くみなくなった

村人の90%は農業に従事しており主な作物は米・野菜・茶ですが、小作人なのでわずかな給料で暮らしています。経済的に苦しく出稼ぎに出る人もいます。最近は気候変動のため干ばつが頻繁で深刻な水不足に悩まされています。隣村の井戸まで水くみに行っていました。JAFS提携団体サルボダヤが村に入り相談して井戸を作ることになりました。井戸までの道も整備され、健康指導や衛生教育も成果を上げ、心より感謝しています。

## 安全な水で皮膚病の悩みから解放

村人の90%が農業従事ですが、土地は持たず小作人としてわずかな給料で暮らしており、都会へ出稼ぎに出る人もいます。気候変動で干ばつが頻繁になり水不足に悩んでいました。生活用水は農業用水頼みでしたが、衛生的でなく水量も不十分なので女性や子どもが遠くまで歩いて水を得ていた上、不衛生な水が原因で多くの村人が皮膚病に悩まされていました。寄贈井戸のおかげで干ばつでも安全な水が得られ、生活環境も改善されています。井戸に感謝し、皆で大切に整備し使います。



中部キャンディ県ラムムラ村  
受益者…104名（25世帯）  
井戸形式…露天式（深さ5m）

【寄贈者】富永信明 様

ご寄付には  
税の優遇措置が  
受けられます

## なくそう貧困。命の水を！

井戸の寄贈にご協力ください。あなたの力がアジアの人々の命を助けます。ご寄贈者に完成報告書、写真、パネル写真を届け、現地の井戸に、ご寄贈者のネームプレートを設置します。

■井戸1基の建設に必要な費用■（2018年4月現在）

インド＝60万円      フィリピン＝33万円  
カンボジア＝28万円      スリランカ＝22万円  
ネパール＝17万円（パイプライン＝25～150万円）  
バングラデシュ＝浅井戸22万円、深井戸55万円

※5年間のメンテナンス費、現地管理費を含む概算です。※現地資材費高騰により費用を1割増に変更させていただきます。ご理解ご協力をお願いいたします。

■お振込み先■ ・郵便振替 00960-6-10835 アジア協会アジア友の会  
・三菱UFJ銀行大阪中央支店 普通1968711 公益社団法人アジア協会アジア友の会

詳しくはアジア協会アジア友の会  
06-6444-0587へ

安全で衛生的な水を確保できないアジアの地域に井戸ができて生活基盤が整い、自立へ一歩踏み出せるようになりました。ご寄贈くださったみなさまに感謝申し上げます。

みなさんのおかげで  
井戸ができた村

## 子どもの栄養・健康が改善できます

【寄贈者】京都暁星高等学校 様

学校に水システムはありましたが、トイレや掃除には海水を使っていました。保護者が学校で料理や洗濯をする際は家から水を持ってきていました。村の水道は毎日1時間のみ配水され、学校には配水されませんでした。村の子どもは栄養ある食事がとれず、35%が平均体重に満たない状態でした。寄贈いただいた井戸の清潔な水により健康・衛生意識が高まり、先生も村人も大変喜んでおります。この水で学校環境も花壇も整備され、美しい学校に変わっていくことでしょう。



ソルソゴン州マトノグ町マンバホッグ村マンバホッグ小学校  
受益者：157名      井戸形式：ポンプ式

【寄贈者】京都暁星高等学校 様

## 洗濯・給食・野菜づくりに活用

村は森の中にあり、天水農業をしています。かつては近くにいくつか泉があり水も流れていましたが、飲料水は別の村や井戸を持つ家から入手していました。学校に1つしかないトイレは流す水もなく常に混んでおり、昼休みに帰宅してトイレを使う子もいました。先生は洗濯や給食、トイレ、飲用のため、水を買っていました。親は子に野菜を食べさせたいと思っても水不足で栽培できませんでした。寄贈井戸のおかげで毎日安全な水を使用でき一同心から喜んでおります。



ソルソゴン州マトノグ町ナブラカン村ヴィセンテドロタン小学校      受益者：99名  
井戸形式…ポンプ式



## 水くみがなくなり生活に余裕

村人の大半が自給農業で現金収入はなく、養鶏・養豚や都会への出稼ぎで現金を得ています。遠くのため池の水や売りに来る水を使っていましたが、ため池の水は動物が糞尿をするので煮沸しないで使う子どもたちは下痢など病気になる、経済的精神的に大きな負担でした。井戸の水は衛生的で安心でき、生活に大きな変化が生まれます。水くみ時間が省け生活に余裕ができます。村からの若者流出にもブレーキがかかり村の安定した発展が期待されます。本当にありがとうございます。



タケオ州トレンアン郡クババ地区タスレン村  
受益者…72名(13世帯)  
井戸形式…露天式(深さ21m)

【寄贈者】末廣眞樹子 様

【寄贈者】株式会社リレーションズ 様

## 学校でトイレ後の手洗い

村人の98%が農業で暮らしています。農閑期には首都ダッカに出稼ぎし建設や皮革工場で働いて家計を補っていますが、最低賃金しか得られず貧困から抜け出せません。雨季には雨水も使えますが、乾季には1.5kmも離れた井戸まで水くみに行っていました。ケガや病気で水くみに出られない時は近くの不衛生な家畜用ため池の水に頼っていました。村の学校に井戸ができ、トイレ後の手洗いもできるようになり衛生意識も向上しました。村人全員が心より感謝しています。



ネトロコナ県タクラコナ地区ソアリカンダ村  
BDP小学校 受益者…344名(86世帯)  
井戸形式…ポンプ式(深さ267m)

【寄贈者】青野裕樹 様

## 安心して健康な生活を送れる

村人は大半が自給農業で現金収入が少なく、養鶏・養豚や首都プノンペンへに出稼ぎで現金を得ています。近くのため池は不衛生で使えず、以前は自転車や荷車で売りに来る水を買っていました。家計に大きな負担でした。貧しい家庭ではトイレも作れず森で用を足し感染症の原因でした。病気は貧しい家計を直撃し精神的にも負担でした。安全な水の取得は切実な願いでしたが、寄贈井戸によって安心で健康な生活を送ることができ、若者を村に近づけられ、村の発展が望めます。



タケオ州トレンアン郡プレイスルック地区プレイスルック村  
受益者…42名(9世帯)  
井戸形式…露天式(深さ19m)

## 農村に若者が残ってくれる

村人の90%は自給農業のため現金収入が乏しく、養鶏・養豚や出稼ぎで現金を得ています。井戸ができる前は2.6kmも離れたため池の水や、自転車や荷車で売りに来る水を使っていました。ため池の水は動物も使うので不衛生です。煮沸しますが、子どもはその習慣がなく、トイレ普及率も20%で衛生意識も低く、下痢など病気の原因になっていました。経済的精神的に大きな負担である病気の心配からも解放されます。生活基盤が充実するので農村に若者を繋ぎとめることができます。



タケオ州ドーンケオ郡ロカクラウ地区ソーチャン村  
受益者…31名(10世帯)  
井戸形式…露天式(深さ32m)

【寄贈者】末廣眞樹子 様

## 貧しい子たちが暮らす寺に安全な水

寄贈井戸は寺院内に作られました。僧侶22名はほとんどが貧困家庭の子どもたちです。カンボジアでは貧しくて子どもを育てられない時は寺に預けます。信仰の厚い村では日々150名が寺に集まります。寺には井戸がなく、寺内の溜池を利用していました。動物が入り糞尿をするため不衛生で、村人は病気になっていました。乾季は干上がり水を買うので、寺の経営を圧迫していました。寄贈井戸によって衛生意識も向上し健康な生活が送れるようになりました。ありがとうございました。



タケオ州トレンアン郡ロネナム地区ソピー村寺院  
受益者…172名  
井戸形式…露天式(深さ21m)

【寄贈者】藤田房二 様

【寄贈者】末廣眞樹子 様

## 長年の夢かない不安が解消

村人の90%は自給農業なので、現金収入にはなりません。養鶏・養豚や首都へに出稼ぎで現金を得ています。井戸ができる前は2.6kmも離れた溜池の水や、自転車や荷車で売りに来る水を使っていました。子どもは水を煮沸せず飲むため下痢など病気になっていました。病気は苦しい家計を圧迫し、精神的にも大きな負担になります。衛生的な水の確保は長年の夢でしたが、井戸が完成し日常の不安が解消し、都会に流出していた若者も村に定着するようになります。



タケオ州ドーンケオ郡ロカクラウ地区ソーチャン村  
受益者…40名(10世帯)  
井戸形式…露天式(深さ31m)



第6回アジア・ユースサミット（AYS）が開かれたことを本誌前号でお伝えしましたが、参加した国内外の高校生たちはその後、学業に励みながら、提案した「地域をよくする」プロジェクトの準備を着々と進め、順次実行しています。12月15日に開かれた高校生のための国際交流フェスティバル、ワンワールドフェスティバル・フォー・ユースで、その中間報告会をしました（海外からはビデオレターで参加）。創意に満ちた高校生たちの取り組みをお届けします。

## AYS参加のプロジェクト 高校生たち着々と実行

### 防災頭巾づくりで地域とつながる

#### ■大阪府立佐野高校

学校のある大阪府泉佐野市の課題とされている「地域コミュニティの希薄化」「高齢化社会」「自然災害への対策」などの解決を目的として、このプロジェクトを始めました。多様な人たちが協力して防災頭巾Ⅱ写真Ⅱを作り、地域の方たちとの交流を深めることで、災害時に全員が協力できる街をつくることを狙っています。



2018年の大型台風で泉佐野市では、停電や断水などの被害が出ました。今後30年以内に起きると言われている大地震の予防も兼ねて、防災に向けて対策する必要があると考えます。対象を最初は佐野高校内の生徒に絞り、現在、生徒会が発行している学校新聞に、このプロジェクトの目的や防災訓練の詳細などを載せて、プロジェクトを認知度向上を図っています。また、校内2カ所に衣服を回収するボックスを設置し、不要になった衣服を生徒から集めています。同高校を会場に生徒をメインとして、回収した衣服から頭巾作りを始めました。

出来上がった第1号の頭巾は、近所の高齢者がくださった着物から作りました。その方は実は、佐野学校が第5回AYSで提案した「佐野市特産水ナス栽培による地域の高齢者の方々との絆作りと地域振興」プロジェクトがきっかけでつながりができた方です。佐

けていきたいと思っています。

私たちのプロジェクトで茨木市の地域問題が少しでも解決され、市がより活性化していけばうれしいです。

### シャツター商店街で世代間交流を

#### ■大阪府立三島高校

大阪府高槻市にあるシャツター商店街を再活性化させて街のにぎわいを取り戻し、また、高齢者と子どもたちの交流を通して地域の結びつき深めることを目的として、このプロジェクトを始めました。

地元の課題となっているシャツター商店街を活用し、子どもには学童保育

がない日の放課後の居場所を、高齢者には経験や知識を子どもたちに伝承する世代を超えた交流場所をつくり、地域の結びつきや活性化を図る計画でした。しかし、現状では継続的に資金や場所を確保することが難しく、地域のお祭り時に同時開催しました。今後はAYSに関する掲示物をつくり、多くの高校生に関心をもってもらえる活動も予定しています。



### 衛生用品を製造へ まず自ら裁縫研修

■ネパール レジマ・タパ・マガール

ネパールの農村地区であるシンドウパルチヨーク郡インドラワティ村10地区で、低カースト層の女性たちに、安全で衛生的な布ナプキンの製造・販売についての職業トレーニングをしています。

ネパールでは、月経中の女性を不浄な存在だとみなし、月経の間は学校に行くことを許さず、小さな小屋に隔離するといった悪しき習慣が根強く残っています。また、使い捨ての衛生用品はありませんが、農村では高価で、ほとんどの人が使ってもゴミ処理できませ



■インド ジェニー・ウィリアム  
マディアプラデッシュ州ラトラム県

### 女性の地位向上へ起業助ける研修

ビラケティ村で、女性の地位や生活の向上のため、技術支援をしています。

村の女性は、能力があっても外で働き収入を得ることを許されません。女性が平等に仕事を得られ、家族や社会に貢献し、一個人として認められる社会になるべきと考えています。

女性の現在の技術力を調べ、関心ある催しを開き参加しやすい環境をつくった後、かごや石鹸作りから販売方法まで学べる研修Ⅱ写真Ⅱをしました。

研修後は、製作に必要な道具を提供しましたが、家庭での労働負担が大きく、プロジェクトの進行為期待よりも遅れていることが、現在の課題です。

ん。加えて、プラスチック製なので、環境破壊が懸念されるなどの問題があります。

女性たちが受ける偏見や環境破壊、雇用機会の問題を解決するため、まずは、自分たち自身が指導できる立場になるための裁縫研修を受けましたⅡ写真Ⅱ。今後は、実際に村の女性たちが自分たちの手でナプキンを作れるように研修指導を予定しています。製品を市場で売り、利益を資金として、さらに多くの住民の活動へと繋げられるような仕組みをつくる計画です。

### 絵本で子どもたちの世界広げよう

#### ■大阪府立春日丘高校

親子で参加できる第1回絵本の読み

野高校は、以前から本プログラムに参加し、地域とのつながりを順次築いて

いたことで、多くの理解者や協力者を得ると同時に、地域に本当に必要な課題を見つける目を、先輩から後輩に引き継ぐことができました。

今年のプロジェクトでは、災害時の対策・行動を学ぶワークショップやフィールドワークを開催し、災害時に取るべき行動についてともに学びます。反省点や改善点を付け加えながら継続的な開催を目指していきます。

聞かせ会を昨年11月、校内で開催しましたⅡ写真Ⅱ。学校のある大阪府茨木市のテーマでもある「子どもの人権問題」や「育児放棄問題」などを題材にし、親子のコミュニケーションを高めると同時に、活字離れという現代の課題解決を目指すというねらいです。読み聞かせの中では、内容に関する質問を行い、積極的に参加してもらうことで、絵本を読む楽しさを子どもたちにも知ってもらおう工夫をしました。実は、これには、若者の活字離れを防ぐという狙いも隠されています。

さらに後半には、外国のおもちゃやゲームで遊び、クイズ大会をすることで、子どもたちからだけでなく、英語に関心のある保護者からも良い反応をいただくことができました。

改善点としては、子どもたちの行動





## 現金を得られる 養鶏で地域繁栄

■インド ケタキ・デカオデ  
(カシナート氏(14才)の娘)



ガッチリ県マハワラ村で、養鶏による収入向上を図っています。非識字率と失業率が高く、少数民族が多く、インドで最も開発途上と言われる地域です。村長や村人と話す中で、現金収入を得る仕事がないのが貧困の要因だとわかりました。

20人の若い失業者に研修Ⅱ写真Ⅱしました。配ったヒナを飼育し、産んだ卵を売る。成長した鶏は売り、新たなヒナを買う。このサイクルを継続中です。地域経済に必要な物や市場での販売方法を、話し合いや訓練とともに提供したことが結果につながっています。これからも、農村の小学校やスラムの子どもたちを支援し続けたいです。

## 知る・聞く・質問する 生徒たちに三つの力

AYSから帰ると、三つの力が生徒たちの身に付いていると思います。

一つ目に知る力。世界では貧困や環境などさまざまな問題が起きていますが、自分たちの身近なところで起こっているのに知らないことが多いです。AYSでは自分たちの地域の課題を調べて発表することで、まず一番近いところから「知る」ことができます。

二つ目に聞く力。AYSにはアジアのさまざまな学生が参加し、英語が必要となります。しかし、ディスカッションでは、英語ができることよりも、丁寧に話を聞き「相手がどのようなことを伝えたいのか」や「自分はどのような意見を伝えたいのか」を考えることが重要になります。また、グループ内にさまざまな意見がある中で、否定することなくお互いの意見を聞き、受け入れ協力することで議論を作り上げられるようになったと思います。

三つ目に質問する力。グループで議論する際は質問をしづらいものですが、複数回の議論を経験することで、質問力を身につけることができます。

AYSでは寮のようなところで宿泊するため、さまざまな宗教や食習慣を持つ学生たちと関わり、一緒に過ごさ



大阪府立  
佐野高校教諭  
向井 小雪

ないと分からないような文化に直接触れることができます。その中で「自分とは違うから」と否定するのではなく、「そのような文化があるのだな」と尊重できるようになりました。

学生たちは参加後に「楽しかった」「スッキリした」などと、多くの学びを得ることで達成感を感じ、より広い視野を養って帰って来るので、学校生活にも生かすことができます。

このプログラムは一過性のものではなく、過去の参加者たちが、実行委員やユースリーダーという形でAYSファミリーとなって帰って来て、引継ぎつてくれています。このような過程があるので、AYSは子どもたちと共に成長し続けていくのだと思います。

◇

このように報告会で、企画プロジェクトを自分たちの力で実行し、時には苦勞し、時には挫折感を感じ、でもやり遂げた喜びを共有することが次の力へとつながると私たちは確信しています。企画し、発表することは比較的多くの人ができると 생각합니다。でもこの実行力までを共に共有し合うことが、JAFSが大切に行っていることです。(JAFSインターン 原大我)



国内外のさまざまなイベントをHPに載せています。記事についてのお問い合わせはJAFSへⅡ裏表紙にアドレス、連絡先

## 8カ国400人が集って交流

組が出演し、国  
際色あふれる音  
楽やダンスなど

「アジアの人々との相互理解と交流の輪を広げる」を目的とした第4回「アジア・チャリティフェスティバル」を12月15日、大阪市天王寺区の大阪国際交流センターで、同センターと初めて共催して開きました。バングラデシュ、パキスタン、中国・ウイグル、ネパール、インドネシア、スリランカ、タイ、ベトナムの8カ国の方々を含む約400人に参加いただくことができました。

タイから招いた「スパハンパタナチャイ」のサックス演奏を皮切りに、22の舞台が続きました。

もう一つの楽しみの舞台は23軒が出店。工夫を凝らしたメニューやここでしか味わえない料理もあり、列ができる店も多くありました。客席には多くの料理と笑顔と拍手があふれていました。参加者一人ひとりが、目や耳、そして舌でアジア文化に触れ、会話ははずみましたⅡ写真。多文化との触れ合いができたのではないかと思います。

チャリティフェスティバルから得られた10万円を、アジアの子ども支援費用に充てることができました。

今回の様子は YouTube (<https://youtu.be/5yhOpKp6o5M>) または写真内QRコード) からご覧いただけます。(第4回アジアフェス実行委員長 渡辺治彦)

## 私が育った光輝く国



JAFS支援グループであるスリランカサルボダヤ友の会が主催する第29回スリランカ講座が2月15日、JAFS会議室で開かれました。

講師はマドゥーシ・バーギヤさんⅡ写真。幼い頃にテレビで「おしん」を見たことがきっかけで来日。大学で経営学を学び、東大阪市にお住いです。

話はスライドを見ながら、次のクイズでスタートしました。

①スリランカの国立病院は無料？  
②スリランカで最も人気のあるスポーツは野球？  
③スリランカでは、仏教の聖地とヒンズー教の聖地は同じ場所にある？

参加者は関西各地からの22名。質問もたくさん出て、活発な学習会になりました。マドゥーシさんは赤と黒の伝統的衣装オサリをまとい、最後には音楽に合わせてキャンディアンダンスも踊ってくれました。もちろんスリランカ料理店に作っていただいたカレーも

## 取り残さぬ社会 実現のため全力

インターン 原大我<sup>たいが</sup>



JAFSでインターンシップ生として活動している大阪経済大学  
の学生です。  
ラオスに学校  
校舎建設など  
の教育支援を  
行う学生団体  
に所属していました。その中で教育の重要性を知り、誰ひとり取り残さない社会の実現のためにも、国際協力にNGOという社会組織から関わってみたいと思い、インターンシップを始めました。

JAFSはさまざまな活動をアジアでダイナミックに行っています。業務は多岐に渡り臨機応変に対応する必要がありますが、大変なこともありますが、日々楽しくやりがいを感じています。JAFS40周年式典の際、皆様と積み上げてきた長い歴史に感銘を受けました。ここまでJAFSが発展してこられたのは、会員一人一人の協力のおかげであると思います。まだまだ慣れないことも多いですが、JAFSの今後の発展のためにも、力になれるよう頑張ります。

## 鍋とかくし芸で新年会



最高でしたよ。

(JAFS会員 安藤 幹雄)  
【クイズ答え】①正②誤(正解はクリケット)③正(アダムスピーク)

JAFSの新年会はこれまで長年、大阪府高槻市の霊松寺で開催してきましたが、今回初めて、JAFS事務所に近い大阪市西区の西船場会館で1月18日に開催しました。西船場公園内にある公共施設で、とても明るく調理も可能な便利な会場です。

今回は30名ほどの会員の方が参加し、ボランティアの皆さんに調理いただいたおいしい鍋料理を味わいながら交流を深めました。JAFS活動報告を始め、フラダンスやかくし芸などで楽しい時間を過ごせましたⅡ写真。

(JAFSスタッフ 柿島裕)



# われら JAFS の 仲間たち

## JAFS 松原

### 里親活動18年

### 中学生も協力

1997年に大阪府松原市の松原第三中学校区フェスタでJAFS会員が出会ったのが、JAFS松原の始まりで、フェスタに23年参加しています。布ぬれ忍しの小学校では国際理解授業がきっかけで児童の募金活動が始まりました。JAFS松原が井戸を贈ったカンボジアの村の小学生ナラ君の里親の会を、2006年からフェスタで中学生1年生と協働で「フレンドサポーター」として引き継ぎました。

ナラ君終了後は、15年のネパール大地震で被害を受けたボテシパ村（JAFS松原から井戸を贈った村）の女の子エソダちゃんを応援し、今も続いています。今年はエソダちゃんの学校や村の様子を知った松原の中学生がエソダちゃんに手紙や写真を届けます。エソダちゃんを知ること遠い国のことが身近に感じられ世界の扉が少し開かれたと思います。

松原では他の中学校区でもバザーや募金活動で国際協力に参加してくれています。私たちの若い仲間、応援団です。毎年のフェスタが楽しみです。

（JAFS松原世話人 橋本末子）



活動打合せをするJAFS松原の会員

## 台風の被災地へもボランティア

### JAFS 関東

アジア諸国の現状を知り理解を深める活動とともに、JAFSぞうすいの会、ウォーカソン、国内ワークキャンプ、チャリティコンサートなどの、広報・啓発・ファンドレイジングを通してJAFSの活動を支えています。活動は随時ホームページ（<http://kanto.jafso.jp>）に掲載しています。

毎年、東京のお台場である国際協力のお祭り「グローバルフェスタJAP



AN」に出席し、食事ブースでベトナム麺・スウオンを提供しており写真、それを楽しみに来場する方もいます。

2019年度は、JAFS 40周年記念事業の一環として、日印友好学園コスモニケタンの先生方を東京に迎えて講演会兼交流会を行い、過去に同校に行った人たちと再会を祝いました。また、関東を襲った台風15号、19号の被災地に会員各自が赴き、支援活動を行いました。

JAFS「アジア里親の会」を通して、インドのマハラシュトラ州の少数民族の小学校「パダトラ小学校」の生徒5人を、里子として支援しています。

定例会の場所としては、湯川JAFS副会長のご厚意により、東京都中央区銀座1丁目27-12のキャビネットビル7階を使わせていただいています。

JAFS本部の活動が関西中心で行われる中、関東の会員を中心に長年地道な活動を行ってきました。現在、メンバーの高齢化に伴い、さまざまな行事遂行が課題になってきています。関東でのボランティア活動を模索している人たちの、多くの参加を願っています。

（JAFS関東世話人 田中壽美子）

## 年間通して活発な催し



4月フリーマーケット出展▽5月アジアの子ども支援勉強会▽6月夕礼拝&ぞうすいの会▽7月チャリティミニコンサート▽10月フリーマーケット出展、アジアを知る勉強会▽11月府民交流フェスタ出展、バザールカフェ出展▽12月アジアンチャリティフェスティバル出展▽1月京都地区新年会・ぞうすいの会▽2月チャリティコンサート。

京都市南区にある洛南教会の集会所を借りて、6〜7名の役員が地区役員会を月1回程度開催し、年度初めに年間計画を立てて活動を進めています。一時期に比べて、強力なリーダーシップを発揮していた役員が亡くなったたりして、大きなことはできませんが、自分たちの身の丈に合った活動を継続的に進めていければと思っています。

活動は「あなたの支援で子どもたちが変わる!!」をテーマにインドとフィリピンの子どもへの教育支援を行っています。

2019年度の活動を紹介します。

こうして1年の活動を書き出してみると、ほぼ毎月、何らかの活動をやっています。コンサートや勉強会は、地域の京都新聞を始め各新聞社へ広報と取材を案内し、10月のカンボジア勉強会では、地元紙の京都新聞が取材に來られ、紹介されました。

年間の目標支援金は40万円で、インドとフィリピンの子どもたちのためにそれぞれ20万円ずつ支援の予定です。

大きな行事は、2月のチャリティコンサートⅡ写真。今年は新型コロナウイルス肺炎により延期していますが、盛会の時は200人ぐらゐの参加者がありました。今は人集めにも運営スタ

## ネパールの村に贈った井戸が完成

### JAFS 姫路

高齡3名の地区世話人が細々とアジアの料理教室と姫路城界隈などを歩くウォーカソンを企画運営したり、行政主催「姫路国際交流フェスティバル」に参加し、月に一度世話人会議を行



ながら、姫路地区からアジアへ井戸を贈ることを目標に地区活動を実施してきました。活動に一区切りつけ、貯まったお金で井戸を贈ろうということになり、金銭的にネパールだったら「いける」ということになりました。

その後2年近く各世話人の家庭の事情もあり、活動は休止状態でした。昨年7月、井戸が完成したとの連絡を受け、姫路地区を代表して、JAFSで企画されていた12月のツアーに参加して現地を訪問しました。

「贈った井戸がどのように使われているか？」を目的に訪れた村では、『JAFS姫路』のプレートがはめられた共同水場に集まってきた人たちから満足そうな笑みが見られました写真。同時に私にも喜びを運んでくれました。この思いを姫路の仲間と、私たちを支えてくれていた人たちに伝えたいと思いました。それは新たな地域活動への励みだったように思えます。ネパールを訪問したことで、新たな課題を、目標を自分たちの地域にも行うことができました。

（JAFS姫路世話人 荒川鉄也）



## 新入会員ご紹介

ご入会感謝申し上げます。（敬称略・50音順）  
2019年12月1日～2020年2月29日

●社員会員  
岡田遥

●賛助会員  
山中康／原田ひろみ

●維持会員  
池田時造／生石清子／田所英二郎／田中和枝／野池徹／若月孝子

●団体会員  
大阪松下幸之助経営を学ぶＰＨＰ友の会  
●里親会員  
谷澤大介／水野結乃美／山中康

## 会費納入者、寄付・物品協力者

温かいご支援ありがとうございます。（敬称略・50音順）  
2019年12月1日～2020年2月29日  
なお夏季・冬季募金へご協力くださった方につきましては、  
1年後の夏季・冬季に別紙で報告させていただきます。

●社員会費  
明見勝好／明見睦子／伊藤誠／岡田一／岡田光浩／久保幸子／齋藤公代／木泰輔／高岸泰子／高田晃宏／田中久雄／端無勝／平山隆史／数内資子／湯川剛

●維持会費  
荒川鉄也／冢本英里／池田時造／石井琢也／石澤千恵子／石田美咲／伊藤昇／伊藤勝／稲垣三千穂／稲富美穂／井上登志子／岩田芳晴／上田昌／上田律子／植村茂／植村ルリ／大野典子／岡田長保／岡本修／尾上禮子／籠島慎二／印牧武人／河上晃浩／菊扇弘子／北田勝／楠井喜代治／熊代琢／古賀暢子／小林与子／小林仁美／近藤聖子／坂本任司／櫻井曉美／猿橋靖／澤田靖子／塩尻加代子／竺原恵美子／正法地由

●アジア・サイクル・エイド支援  
堺市役所

●インド・HIV子どもと家族支援会費  
苗村登美子／JAFSいのちの会枚方

●インド・パダトラ小学校支援  
因幡明洋／河内長野高野街道ロータリークラブ／鳥居建十／伯舟庵／村上清子

●スリランカ・サルボダヤ支援会費  
中西豊次／松原直弘

●チャイルドアカデミー指定寄付  
アジア・チャリティフェスティバル実行委員会／(株)トリニティアーツ

●ネパール・ビトゥリ支援会費  
小川幸子／倉光和之／小松朱美／塩尻加代子／前田美津代／前田豊／宮本博幸／米本美津子

●ネパール指定寄付  
関西学院千里国際高等部／(株)日本入試センター

●ネパール地震被災者支援寄付  
霜島正／元橋亮治／株式会社モンベル

●貧困対策指定寄付  
東代清隆／JAFSないわ西地区会

●フィリピン障害者支援  
小柳二郎／中谷誠

●フィリピン台風被災者支援寄付  
大隈章・禎子／大本和子／坂手悦子／末永雅典／東代清隆／畑中義雄／船戸康夫／松原直弘／JAFSマロニエイクラブ／八木健次／吉田聡子

●ロヒンギャ難民支援  
亀田京子／北陸学院小学校

孝子／和田征子

●賛助会費  
青木洋／赤石尚子／浅野直人／井坂勝則／井上賢／今枝ゆかり／入江保夫／宇田和博／打越道夫／応地利明／太田愛子／大仲紀子／大丹生あい子／大野篤一郎／岡村房子／小野英俊／貝柄徹／垣鍔祐介／勝原慶子／加藤昌彦／加藤美樹／亀谷真佐美／川口勝三／川崎映子／川崎隆二／川端香織／河村徳次／川村幸正／河本朋子／北川健治／木下直美／木下マキ子／木村征代／木元典子／小出幸代／小阪勝／小島学／小谷正登／後藤陽子／小林照子／小林陽子／昆文彦／笹原由美子／真田朱美／左野菜穂子／澤智子／謝秀連／柴田好子／島田真知子／下久保恵子／白山礼子／聖母奉獻修道会／瀬川健三／関川温子／高橋弘美／高橋幹雄／田口博國／竹内泰子／竹原庸起子／田代隆子／田中佐苗／田中通成／谷口倫子／田宮節子／日野西光尊／長克宣／塚本善弘／月城文子／辻昌子／坪田秋成／鶴丸志よう子／出口豊子／デリブ・チャンドラール／富田淳子／友成陽子／鳥井章司／中尾則勇／中岡浩司／中川豊／中島節子／中西美代子／中西佑介／中村恵美子／中村幹夫／夏樹葉／仁井恭子／西田京子／新田留美子／箱崎健明／八田磨／羽田孝彦／浜下昌宏／濱野正美／林節子／原田ひろみ／春木眞巳／東原輝明／日高雪子／平岡由紀子／深井正博／福岡誠之／藤木茂／藤原克彦／藤原幸美／別所衣子／(株)ボックス／堀口節子／堀米弘子／牧和矢／松井和美／松原悦子／松本和子／マツラ明日菜／真鍋ミサ子／三里健一／水本裕子／溝口清子／溝口竜太郎／南光子／宮嶋淳／矢賀繁之／八木澄子／安井映似／柳本京子／山崎兄・恒子／山下玉英／横山里美／吉川英昭／吉野基平／霊松寺／渡辺豊子／中西貴子

●団体会費  
大阪松下幸之助経営を学ぶＰＨＰ友の会／関西ナショナル・トラスト協会

●法人賛助会費  
(有)アテナ／(株)グローバル／(株)グローアップ／(株)公益社／仁愛会／中西産業(株)／寢屋川教会／(株)村上製作所／山田不動産(株)

●里親会費  
赤石尚子／明見勝好／荒川奈秀子／幾谷眞規子／岩田史子／梅本史郎／大川愛子／大島久子／大林昌子／大平さゆり／岡田麻理／岡部美和／岡村遍導／海津加代子／加藤美樹／印牧武人／川端香織／喜多村裕香／木村征代／久留須眞由美／古賀旭／小谷正登／小林剛／小林与子／Compass Tokyo Japan／佐々木竜二／佐藤雅美／左野菜穂子／謝秀連／島村和佳奈／新保崇浩／杉野佳代／住友藍／関口淳／瀬田敦子チヤリティコンサート実行委員会／高岸泰子／田代隆子／田所英二郎／田中修／谷口ちる子／谷澤大介／筒井みゆき／寺西哲志／東代清隆／富井啓介／友成陽子／外山裕之／中西加那子／中村初江／中村弓絵／JAFSないわ西地区会／西浦暢子／西澤純／西村藍／日本観光情報センター／畠山ひろみ／八田磨／濱口薫翠／平本幸一／福岡名津子／福田忠明／古川武／真砂恵美／松原悦子／松本和子／的場義恵／真鍋ミサ子／水野結乃美／村上聡代／森崎律子／森山涼子／八尾眞弓／安永拓史／山内庸行／山本永津子／山本京子／矢野佳代／Ramon Vedell Gail／ReShopKANAU／和田義次／渡辺治彦／渡辺充江

●一般寄付  
JAFS事務局／熱田親憲／兼松利木雄／桑村壽子／齋藤公代／櫻井紘哉／

篠原勝弘／ソフトバンクつながる募金／田中久雄／谷口陽子／土屋菊男／富松英二／ナモナキビリオネラ／畠山ひろみ／全国ＰＨＰ友の会／藤原正昭／眞砂哲志／村上公彦／森崎律子／森本榮三／山本宏昭／湯川剛／ReShopKANAU／協家崇夫

●井戸指定寄付  
(一財)エオサンタ／蛭名健仁・加奈子／大阪府立大手前高校／小澤勇／延原修／八木健次

●井戸積立  
ギャラリイいろはに／仁愛会／JAFSぞうすいの会／日野西光尊／松浦貞二／ゆりかご幼稚園

●井戸一基建設支援  
○インド  
(株)ユニコーン

○カンボジア  
徳島県立脇町高校

○スリランカ  
富永信明／(有)ファンシープランニング

○ネパール  
関西学院千里国際高等部／(株)グローアップ／田代博

○バン格拉デシュ  
(株)グローアップ

●アジア・ネットワーク奨学会費  
上野孝一／村上公彦／吉田俊朗

●アジア・子ども支援寄付  
松尾慶治／饒平名知幸

●アジア地域医療支援寄付  
久光製薬(株)ほっとハート倶楽部

## 領収書発行および寄付金控除について

当会への寄付および会費（社員会費除く）は税制上の優遇措置（寄付金控除等）の対象となります。

優遇措置を受けるのに必要な当会発行の領収書として、納入いただく毎に郵送する**領収書ハガキ**が有効ですので、**確定申告まで大切に保管**してください。

なお毎月分割で銀行口座自動振替にて会費納入くださる方には、1月中旬に、前年の1月1日から12月31日までの会費・寄付の合計額の領収書を封書で郵送いたします。



# 里子の笑顔

今回はインドの里子の生活をお伝えします。中央部マハラシュトラ州の中東部にあるパダトラ小学校は、日印友好学園として2001年、地域に住む少数民族の子どもたちが1人でも多く就学できるようにと設立されました。7年生まで修了することができません。



た。

最近ようやく里親が決まったスラジュ君（3年生）は、1年生として入学した6歳のときに親元を離れ、学校の寮で同級生や先輩たちと生活しています。彼らが住む地域は森の中。インド発展のニュースを耳にするこの頃ですが、彼らのほとんどがまだ生活の大半を森の恵みでまかな

この学校は「アジア里親の会」の支援で運営されています。小さいときから寮に入って頑張っている子どもたちがまだ多くいます。1人でも多くが里親の支えを得られることを願っています。（JAFSスタッフ 熱田 典子）

「アジア里親の会」里親を募集  
勉強したくても経済的理由で学校に行けないアジアの子どもたちを里親制度で支援しています。  
・対象国はインド、カンボジア、ネパール、バングラデシュ、フィリ

ピンです  
・会費は里子1人月額2千5百円（年額3万円）。※現地物価上昇のため4月入会より変更  
・里親には、里子の写真や成長記録をお届けします

## 森の家族と別れ、学校の寮で共同生活

# アジアの友から

RUDYA代表カシナート・デオガデ氏の妻  
ジャヤ・デオガデ（インド）



貧しいガッチロリ地域のために働くカシナート（写真左。14〜17歳参照）はとても親切で心温く、困っている人を見ればいつでもすぐに助けます。夫をとっても誇りに思っています。日曜でさえ毎週打合せや行事に出かける夫に時々困惑しますが、夫のおかげで問題が解決したと聞く

と、心の底から満たされます。日曜に家にいない夫の仕事は私が進めるし、私の支えがあるから彼は不安なく仕事ができます。夫は時間にも、食事はちょうど良い頃合に用意します。時には彼の問題を共有し共に解決します。JAFSのお客様の食事をもてなすのも幸せです。夫はいつも忙しいので、息子や娘の勉強は私が見ますが、彼は夫や父とし

## 夫の仕事を陰で支える

でも、とても責任感があります。時々私たちはパダトラ小学校を訪れ、先生や女子生徒と問題点を協議します。女子生徒は安心して私に相談します。私は聞いた内容を夫に伝え、解決法を共に考えます。女子の月経期などの健康管理を導きます。息子と娘はJAFSやRUDYAと関わって活動しています。父に似て2人とも社会活動にとても興味があるのですが、私は、勉強そっちのけで活動に没頭すべきではないと時々心配します。勉強が第一で、余った時間で父の仕事を手伝いなさいと言います。ただ彼らが活動に心から取り組んでいるのは嬉しいことです。活動から多くを学び、国内外に多くの友人ができ、人間的に成長していると感じ、誇りに思います。彼らは地域の問題を考え始め、彼らなりに解決へと前向きに取り組み、時には父に助言します。父親も子どもの気持ち尊重します。子どもたちが父親の仕事を継いでくれると確信し、心から願っています。夫と子を陰で支える私に目を向けてくれて嬉しいです。女性は夫の成功のために尽くすべきだと思います。（翻訳：JAFSスタッフ 川本裕子）

## 編集後記

桜 と新入学の季節が来ました。JAFSも創立時の理念に戻り、支援していただいている皆さんに、新鮮な情報をタイムリーに届けるよう頑張っていきたいと思います。（金）

新型コロナウイルスの感染がひとたび始まってしまうと抑制が困難と世界中が思い知りました。とともに手洗いなど基本的な衛生行動の有効性も知りました。感染を始めさせない食肉管理をはじめ衛生意識の向上にアジアで取組む必要性を再確認しました。（川）

ワ ンマン、ワンガン、ワンボウト（男一匹、銃一丁一票）―西部劇の頃のスローガンです。その米国の大統領選挙は11月3日。大阪都構想の住民投票も今秋になりそう。いずれも注目される有権者の一票です。（敏）

韓 国映画「パラサイト 半地下の家族」がアカデミー賞作品賞など4冠受賞、90年超の同賞史上、英語以外の作品で初の快挙。大阪梅田で上映中と知り、発表翌日、映画館へ。新型コロナウイルス拡散のさ中でも超満員でした。（督）  
J AFSの地区会やグループは、アジアの子ども教育支援や井戸支援にイベントを開催して支援金を生むことも多いが、感染防止のためJAFSもイベント中止・延期に。支援を待つ人たちを裏切れないし悩ましい。（和）

食品リサイクル工場を見学する機会がありましたので、見聞をおすそ分けします。

昨年10月に食品ロス削減推進法が施行され「食品ロス」という言葉に触れることが増えました。まだ食べられるのに廃棄される「食品ロス」を減らす行動を、事業者も私たち個人も心がけることが求められています。本誌138号で「捨てないで食べるエコ」と題し、私たち一人一人が食品ロスを出さない食べ方や調理について取り上げました。減らす努力をしても家庭で出てしまった食品ロスは、ごみとして捨てる他は家庭用生ごみ処理機などで肥料にリサイクルする方法があります。

同じようにスーパーや飲食店など事業者から出る食品ロスも、出さないこと減らすことが最優先ですが、出てしまった食品ロスを、ごみとして燃やすよりは役立つものに生まれ変わらせるのが、見学した食品リサイクル工場です。

目にした食品ロスは、中華屋さんから出た餃子のタネやラーメンの麺、スーパーの半額シールが貼られた刺身（大トロ）、大袋入りのキャベツの外側の葉など。これら店舗の売れ残りの他に、学校給食や公共施設からの食べ残しなど含め、1日70トンの食品ロスが入ってくるそうです。これを機械で荒く砕きながら容器と食品を分離し、食品をすりつぶしドロドロにします。そして廃食油と混

## 環境コラム

## 食品リサイクル工場

皆さまが会員となつてサポートして下さることで、安定した活動計画ができます。継続した活動をしていくためにも、ご協力をお願いいたします。

## 入会ご案内

|                        |      |                            |
|------------------------|------|----------------------------|
| A. 維持会費                | 年額1口 | 12,000円<br>(月額1,000円)      |
| B. 賛助会費                | 年額1口 | 6,000円<br>(月額600円=振込手数料含む) |
| C. ジュニア会費 (高校生まで)      | 年額1口 | 1,000円                     |
| D. 団体会費                | 年額1口 | 20,000円                    |
| E. 法人賛助会費              | 年額1口 | 50,000円                    |
| 会費・寄付の振り込み先            |      |                            |
| 郵便振込 00960-6-10835     |      |                            |
| 三菱UFJ銀行中之島支店 普通1007011 |      |                            |





募金にご協力をお願いします

アジアの安全な飲料水がない地域で  
貧困に苦しむ人たちを支援する活動に使われます

郵便振替 00960-6-10835 アジア協会アジア友の会



HPもご覧ください



Accountability Self-Check 2012

▲街の中心部のバイトウラフマン・グランドモスクに整った服装で礼拝に来た子どもたち。モスクは2004年のスマトラ沖大地震と津波に耐えて残った＝2020年1月13日、インドネシア、アチエ州バンダ・アチエ市

◀表紙の写真 ネパール、シンドウバルチョーク郡インドラワティ村で進む大規模揚水システム建設。長さ3m、重さ70kgの金属パイプを険しい山の中につないで埋める難しい工事が続く＝1月4日。4～7頁に関係特集記事

編集・発行：公益社団法人 アジア協会アジア友の会

〒550-0002 大阪市西区江戸堀1-2-14 肥後橋官報ビル5階

☎ 06-6444-0587 FAX 06-6444-0581

URL : <https://jafs.or.jp> E-mail : [asia@jafs.or.jp](mailto:asia@jafs.or.jp)

2020年4月141号 発行人：萩尾千里 編集人：村上公彦

広報企画委員長：法花敏郎

編集アドバイザー：松本 督、黒沢雅善

編集スタッフ：熱田典子、岩崎準一、大本和子、柿島裕、  
金井英夫、川本裕子

印刷製本：あさひ高速印刷株式会社